

# St. Luke's International University Repository

International society of nursing in  
genetics@@@ISONG 2000 education vonference

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 有森, 直子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10285/393">http://hdl.handle.net/10285/393</a>

This work is licensed under a Creative Commons  
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0  
International License.



## 国際学会・セミナー参加報告

### 1. 国際協力事業団「ケニヤ共和国医療技術教育強化プロジェクト」での協働活動

国際協力事業団「ケニヤ共和国医療技術教育強化プロジェクト」はナイロビにある Kenya Medical Training College (KMTC) の16学部を持つ本校を対象に1998年3月から技術協力が開始されている。KMTCはケニヤのコメディカルの95%を養成している教育機関で、ナイロビ本校にある地域看護学部(保健婦・助産婦・看護婦統合カリキュラム)を含め16学部をもっている。日本側協力機関として国立公衆衛生院・国際医療福祉大学が中心となり、チーフアドバイザー、看護学部、保健記録情報学、栄養学に長期専門家を派遣し、また、臨床医学、環境保健科学、医学教育学にも協力対象として活動している。加えて、ケニヤ全土に広がる分校の中堅教員にも10週間の研修を援助している。

2000年度はカリキュラム改善をテーマに研修会が8月14日から10月4日まで開催され、本報告者は研修会の講師の一人として8月8日から9月4日まで「看護カリキュラム改善に関わる技術指導」の任を得て、ケニヤ共和国の首都ナイロビに短期派遣された。研修会ではカリキュラム開発過程の「カリキュラムデザイン」と「科目概要と教授内容」に関する講義・演習を担当した。また、特別講義として「日本の健康相移行に応じた看護カリキュラムの開発」を行った。研修は朝の祈りから始まり、30名若の中堅教員の取り組みは熱心で、英語で講義することを除いて何の違和感もなく活動させていただいた。

滞在中は、さらにケニヤ国の健康及び看護教育状況の概況、及びケニヤ国内の現地視察の機会を得た。地方を回り、女性の経済自立を目指す農業支援プロジェクトあるいは苗木づくり支援プロジェクトや社会林業プロジェクト視察と広く健康・看護プロジェクトと有機的に働くべきプロジェクトについても視察させていただいた。ケニヤも早魃にそして政治的不安定さ、経済格差に住民が苦悩している状況と、同時にケニヤの観光資源となっている自然と野生の動物たちを目の当たりにし、違いと共通する経験を共有するグローバルネットワークの重要性を考えさせられた。アフリカは日本からは遠い存在であるが、「全ての人の健康」(Health for All)を指向するWHO看護開発センターのメンバーとして可能で効果的協働活動を発展させてゆければと考える。

(研究法：田代順子)

### 2. 第11回国際がん看護学術集会(11th International Conference on Cancer Care 2000, Oslo)参加報告

2000年7月31日～8月3日ノルウェーの首都オスロで第11回国際がん看護学術集会が開催された。本学からはミセス・セントジョン記念教育基金の助成を受け小松教授とともに参加し、口演では「Development of a questionnaire to measure treat levels for Japanese adult undergoing hematopoietic stem-cell transplant」を発表(外崎)し、示説では文部省科学研究費(基盤研究A;研究代表者・小松浩子)「がんデイケアモデル開発のための実証的研究」の経過報告を「An innovative approach to caring for cancer patients in Japan」と題して行った。

本学会は「Building Bridges for the Future」をメインテーマとし、全体会では各地域からがん看護とがん予防における今後の看護プログラムについて報告がなされた。がんは来世紀においても人類の健康上の大きな問題として引き続き取り組むべき課題であるが、「経済的状況や教育レベル、がん予防知識の普及状況」、「がん予防に関与できる看護スタッフのマンパワー」、「各国の医療保険制度と予防対策との関係」、「都市化、自然破壊などの環境的変化と発ガン物質への暴露の危険性」などのそれぞれの状況が各地域により異なり、地域性を考慮した取り組みの必要性を再確認できた。特に開発途上国におけるがん予防は手つかずの部分が多く、わが国は経済的支援のみならず看護においてもこれまでの知見を提供し、支援していくべき責務があることが今学会への参加を通じて感じられた。

(成人看護学：外崎明子)

### 3. 国際遺伝看護学会(International Society of Nursing in Genetics: ISONG 2000 Education Conference)参加報告

国際遺伝看護学会(ISONG)への参加は、2回目となる。今年は、2000年10月2～3日にアメリカ・フィラデルフィアで開催された。この学会に引き続きアメリカ人類遺伝学会(The American Society of Human Genetics: ASHG)にも参加している。こちらは、Geneticに関わるあらゆる分野の人が集まる大規模な学会である。ISONGの参加者は100名

弱で、「国際」とはいえ、アメリカの看護職が中心でありその他の国からの参加は1名程度で、日本からの参加が5名もあることは特記すべきことであろう。ISONGの会員数も200名程度と少ない人数であることは、アメリカには遺伝カウンセラーと遺伝看護婦が2分化されており、その認定資格等の問題を抱えている事情があるように思われる。遺伝カウンセラーについては、現在日本においても遺伝医療に関わるさまざまな職種で検討を重ねており、アメリカの歩んできた行程と現在生じている問題は参考になった。

肝心の学会発表は、文部省科学研究費で進めている「遺伝看護の実践能力を育成する教育プログラムの開発と評価」の初年度として、日本における遺伝看護の実践能力について、インタビューを中心にまとめた内容をポスターセッションで発表した。小さな学会のため、ほとんどのメンバーは顔なじみでとても居心地のよい学会である。ここで広がった人脈が、日本遺伝看護研究会で主催したセミナーや日本看護科学学会交流集会の参加を成功に導いてくれた。私にとってISONGは、人的な交流と知識の拡がりという学会参加の意義を最大限にもたらしてくれる学会のひとつである。

(母性看護・助産学：有森直子)

#### 4. ミシガン大学老年学夏期セミナーの企画・運営・参加報告

ミシガン州アナーバーにあるミシガン大学メディカルセンターを中心に、今年度も8月に老年学夏期セミナーが開催された。今回のセミナーは10年目にあたる節目であり、同時に最終回のセミナーで、運営委員一同、特別の思いが込められたものであった。

このセミナーの目的は、チームアプローチを通して高齢者ケアの質の向上に焦点をあて、参加者はさまざまな専門職種の役割を理解し、学際的チームアプローチをとることができるようになることである。毎年国内の保健医療福祉に関する専門職から参加者を募り、20名を選考し過去8年間にわたり派遣してきた。

筆者は看護職として後期5年間の日本側運営委員を務め、看護の立場から毎年のプログラム作成に関与してきた。運営委員は他に、医師、臨床心理士、介護福祉士、福祉学者からなり、運営委員もチームによって支えられ、また専門性を発揮してきた。

一方、米国側の運営委員はソーシャルワーカーのRuth Campbell氏をプログラムコーディネーターとして、医師、ヘルスエドゥケーター、看護職、政治学者、事務職、ボランティアからなり、日本側運営委員との連絡を取り合いながらプログラムを構築していった。

毎年プログラムはbrush upされ、完成度の高い2週間のプログラムに集約され、過去の参加者からの評価も高い。

過去8年の参加者は160名を数え、終了者は自発的にミシガンネットを組織し、国内における勉強会の開催、地元セミナーへの講師派遣、情報交換など活発に活動している。

今年度は総括セミナーであったため、例年とは趣向を異にし、1週間のプログラムで参加者は過去8年間の参加者に限定され、いわば気心が知れた同士の“同窓会”的なセミナーであった。

主なプログラムを紹介すると、「チームづくり」「痴呆について—世界的に著名なPeter Whitehouse氏の講演と氏を交えてのグループディスカッション」「日本側参加者のチームアプローチ事例の紹介」「チャレンジプログラム」「地域へのoutreach：機関見学—Hannan House, Senior Independent Day Center, デトロイトPACE Program」などであった。

今年は過去の協力機関への感謝状授与や、Japan Dayと称して関係者とそのご家族をピクニックに招待し、風船つり、焼きそば、盆踊りなど日本から持ち込んだ材料で縁日を開催して感謝の意を表す企画も盛り込んだ。

最終日には、ミシガン大学副学長臨席のもと、ミシガン大学ターナークリニック前の広場に銀杏の木を記念植樹し、木の成長を見に再訪することを互いに約束したのであった。

この5年間、筆者にとっては夏が訪れることが一番の楽しみであったが、ひとまずこの形のセミナーは終了することになった。新たな企画として、“train the trainer”つまり教育する人をトレーニングするという企画が持ち上がっている。

わが国では4月から介護保険制度が施行され、ケアプラン作成はチームで行うことがいよいよ本格化した。過去の参加者はケアマネージャーとして各地で活躍し、“ミシガン魂”をもって各専門職を尊重し、かつその専門性を発揮している。このような10年先を見越したプログラム作りには敬服する。

ミシガンモデルから学ぶ高齢者ケアはまだまだまだたくさんありそうである。

なお、本セミナーは(財)長寿社会開発センター、(財)ユニバーサル財団、田辺製薬(株)、厚生省の主催・企画・後援によることを付記する。

(老年看護学：亀井智子)